

家庭・保育所・幼稚園

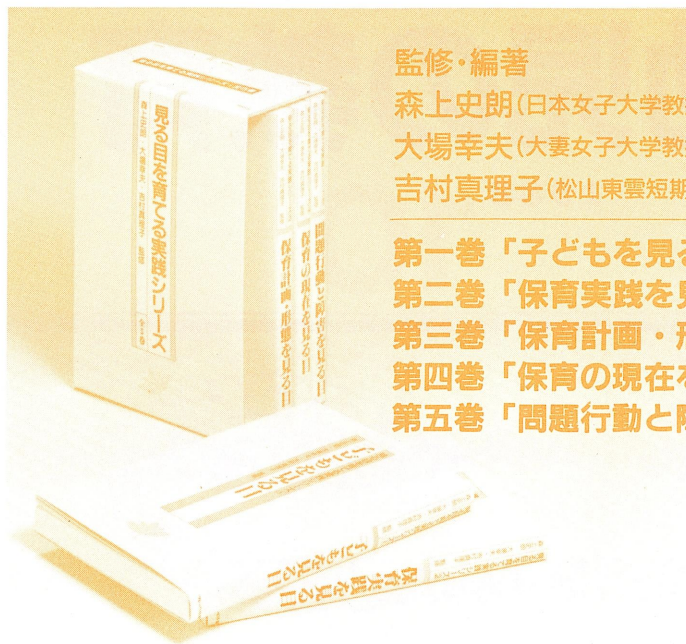
幼児の教育

1988
10



見る目を育てる 実践シリーズ

全5巻



監修・編著

森上史朗(日本女子大学教授・東京大学講師)

大場幸夫(大妻女子大学教授)

吉村真理子(松山東雲短期大学教授)

- 第一巻 「子どもを見る目」
- 第二巻 「保育実践を見る目」
- 第三巻 「保育計画・形態を見る目」
- 第四巻 「保育の現在を見る目」
- 第五巻 「問題行動と障害を見る目」

保育の本質をしっかりと把握するためには、「子どもを見る目」「保育を見る目」を養わなければなりません。本シリーズでは、実践例を通して、わかりやすく「見る目」を解説していきます。

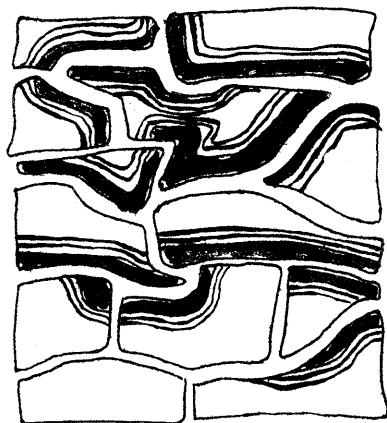
全5巻・A5判・平均228ページ・定価各1,700円・セット定価8,500円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十七卷

第十号

幼児の教育 目次

——第八十七卷 第十号——

© 1988

日本幼稚園協会

△巻頭言▽

生きる力の培養期……………川崎 千束…(4)

平和のための教育……………津守 真…(6)

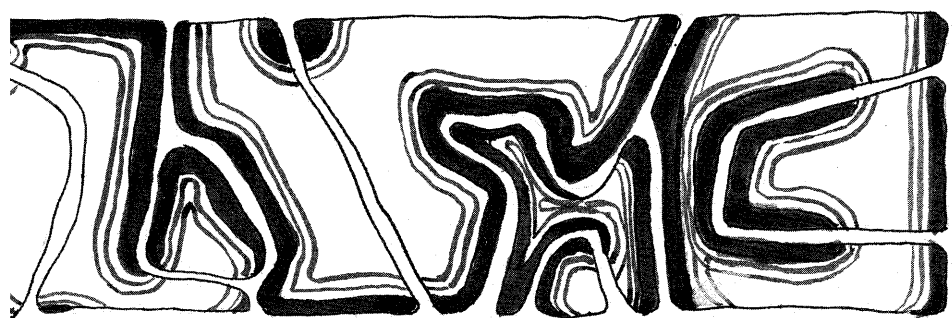
自由保育の原点を求めて……………小川 剛…(12)

S F 的読み解き 子どもという風景

第四十二回 乗ること……………堀内 守…(19)

子どもと(7)

十月・青空を仰いで……………清水 光子…(29)



昆虫の世界 夏から秋へ①……………小島 賢司…(37)

子どもの領分……………国吉 栄…(42)

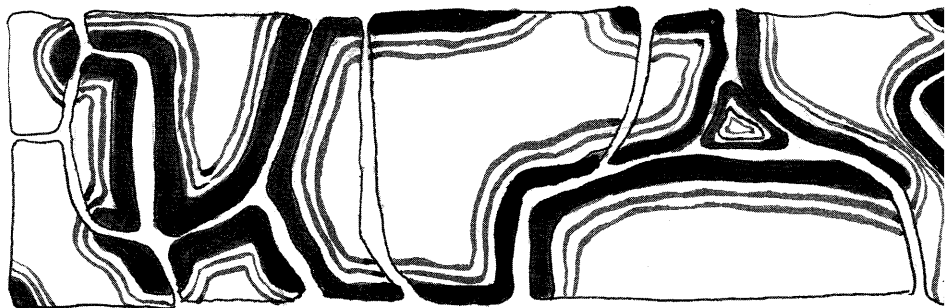
南の島の子どもたち(4)

子どもが変わるに「とき」あり……………浅野 恵美子…(48)

若いお母さんたちへ

辞めて考える子どものこと……………はるにれの会 河合 聡子…(56)

カット・福田 理恵
編集部・向山 陽子



生きる力の培養期

川崎 千束

幼児期は、生きる力の培養期であると思います。倉橋先生の保育理念も、これを原点として、理論を展開されています。

精神病理学の権威故島崎敏樹先生は「誕生から数時間以内に、母の乳房を吸う目的行動に移る。人間は生きる為に、新生児の時点で本能運動が見事にでき上っている」と。この、あの子もこの子も、生まれながらに持っている強い欲求を、育てるか、稀薄にしてしまうかは、幼児期における大人たちのかかわり方に左右されるでしょう。

六月号に黒田成子先生が、改訂される幼稚園教育要

領は、倉橋先生の幼稚園真諦の意義に近いと。私も今さらであっても、現今のあまりに幼稚園的な保育から脱却するなら、子どもたちの幸せのためによるこばしく思います。

二十数年間、入園考査の面接で「どんな子に育てたいか」という私の問いに、母親の殆どが、「健康で素直な子」と答えています。素直さを、子ども自身の徳性として望んでいるのか、それとも大人の物指しが先に在って、それに従うのを、素直とするのか。私は素直より先に、大切な自我の確立を望みます。一応身体的にも自立が叶い、自分というものを

試してみたい三歳頃の変革期に、自我・反抗・我が儘・いたずら等、この期の特権を十分に体得させて

こそ、生命のよろこびを感じ、やがて必然的に、自己抑制・思いやり・正義感などの心情が芽生え、更に判断力・知的好奇心などの知覚が鋭敏になっていくのが、正常な発達の過程でしょう。大人が座禅をくんでいる時は、精神が集中するので、その脳波の図式は穏やかであると。なら、子どもたちが、遊びに没頭している時の脳波の図式も、穏やかではないでしょうか。現代社会情勢の中で、この穏やかさは、子どもたちには欣求の世界で、是非、この境地に浸らせたいたいものです。

私は昭和の初期に、倉橋先生方の教えを受けたことを、有難く且つ誇りとしています。

正規の授業以外に、子どももの若く、しかし未熟な感性を、陶冶してくださったことが、大きく関わっています。狩野芳崖の悲母観音、菱田春草の落葉の

絵の前に立ちつくした感動は、永く私の心に生き続けています。

現在、保育に関する大学教育で、若い心の内面のうずきを理解し、無限の成長へと誘う授業が、どれほどなされているでしょうか。

教育要領改訂と共に、大学教育の検討も必要なのは。例を音楽にとって、子ども世代でも、音楽はピアノ一辺倒でした。家庭に入って、義兄がハーバード在学中に集めたレコードを聴いた恍惚境。何故在学中に名曲の鑑賞がなかったのかと残念に思うと同時に、誰しも、美や音楽に対して潜在能力を持っていることに気がきました。ピアノが堪能でなくても、歌うこと、リズム感、作詩作曲の能力があるかも。ピアノが弾けなくては駄目とする偏向では、ヴィヴィッドな保育者は育ち難いでしょう。

(元東京家政大学附属幼稚園)

平和のための教育

津守 真

先日、ある幼稚園の保育を見学したときのことである。ひとりの男児が、ブロックをつなげてピストルをつくり打ち合いをしていたが、私にその先を向けてきた。私はどのような応答したらよいか一瞬ためらった。

このとき私の心に去来したのは、もうかなり以前から心に留まっていたいくつかのことであった。

ユネスコから出版された「平和の種子」という本の英語版を、私は二年程前に読んだ。

この書物は O M E P（世界幼年教育機構）の前世界総裁グタール女史が、世界の約十か国の教育者たちと平和教育に関する委員会をつくり、いろいろの国の実例にもとづいて討論してまとめた書物で、子どものときに日常生活の中で平和をつくり上げる体験をすること

が、世界平和の基礎であることが主題となっている。子どもたちの間で普通に起こるけんかや葛藤をこの観点からもう一度考えさせてくれる。平和のための教育は子どもを「柔弱にしたり活力を奪ったり無気力にする」こととは違う。「平和のために立ち上がり発言する者は、ときによって大きな精神的勇気を」もたねばならない。このような観点から、葛藤を平和的に処理する体験するのに大人はどうしたらよいかという、日常保育の中の問いをこの書物は提示している。世界という大きな舞台の上で教育を考えさせてくれる大切な書物である。

その書物の中で武器の玩具について次のように述べられている。「スウェーデン政府は一九七九年の一月八日から戦争玩具の販売を禁じました。一九八二年九月十三日に、欧州議会は、45対82の賛成（12の棄権）で、欧州共同体の国々で、武器で遊ぶことを法的に禁止することを決定しました。その本文は、子どもたちが武器好きになる危険性を強調し、好戦的玩具の製造と販売を次第に減少させ、建設的な玩具にとってかわるよう勧告しています。」そのすぐあとで、少年たちは精巧な戦車やピストルの玩具を好み、それらが日本製であることが記されている。日本について言及されている唯一の箇処である。

私が青年だった昭和二十年代、武器の玩具については教育界でもジャーナリズムでもしばしば論議されていた。いつのまにかそのような議論は消え、日本は武器の玩具を世界に輸出する国として知られるようになっていく。平和を愛する人間を送り出すのでなく。

そのことをあらためて考えさせられていたとき、私の養護学校で、よそから頂いた玩具

の箱の中にピストルと刀があった。養護学校の子どもたちはこういう物にあまり興味をもたないのだが、たまたまそこにいた兄弟が目ざとくみつけて、それを振り回しはじめた。私は自分が校長である学校に武器の玩具をおきたくないと思い、直ちにそれをごみ箱に捨てた。私が決然とそうしたので、そのことが大人たちの論議を呼んだ。ピストルや刀で遊んだからといって戦車を好む人間になるとは限らない、子どもの中にある攻撃性は子どもうちに解放しておかねばならない、ピストルをもたなければ相手に立ち向かえない弱い子もいる、TVで子どもたちは日常的にみている物だなど……。これらの論議を考えた上でも、私には、それには武器の玩具によるのではなく、もっと別の仕方があるのではないかと思える。武器の玩具を用いないというのは、教育を世界と歴史の視野で考える大人の決意の表明であり、保育者の心意気である。

ブロックでピストルを作り私に向けてきた子どもを前にして、これらのことが私の心を横切った。これは子どもの中から出てきたもののだが、攻撃性にせよ別の関心にせよ、それに対して大人がピストルで応ずるのでなく、もっと違った仕方で受けとめることができないかと考えた。

私は床に散らばっていたブロックの車の輪を組み合わせて、自動車と言ってみせると、その子はすぐにそれに応じて自転車、三輪車などを作った。私はピストルがその子の関心

ではなかったことをその場で察した。その男の子はブロックをつなげながら、「ぼくのお父さんはラーメン屋さんで、きょうは朝かえってきた」と私に穏やかに話しはじめた。すぐ脇にいた女の子は「うちのわきの道路を通る車の音は同じでも、違う自動車なんだよ」と話す。私はその子の家は自動車の音に悩まされているのかもしれないと推察した。さっきの男の子は「うちには赤ちゃんが生れた」と話を続けた。まわりの子は口々にうちにも赤ちゃんがいるとか、「うちはまだ赤ん坊じゃなくて一歳半だけど、きのうぼくは指をかまれた」など話はずんだ。「隣のうちのおじさんのクレール車は一人のりで小さいんだ」という女の子の話にヒントを得て、私は空箱を重ねて貼り、切り込みを入れてクレール車を作った。するとさっきのピストルを作っていた男の子がそのクレール車に更に箱をつみ重ね、セロテープで貼って背の高い車ができていった。私はこの子はいまや赤ん坊の生まれた家族の中で自分自身をつくりあげる過程にあるのだろうと考えた。

この日、ブロックをつなげたピストルを向けてきた男の子に、私もピストルで応答することもありえたのだが、一瞬立ち止まって、別の発想をしてよかったと思う。

この日は私は保育を見る立場にあった。クラスの全体は担任の先生がしっかりと保育をしているのだから、私は出会った子どもたちをゆっくと見ることができるといふ恵まれた立場にあった。また、私が担任をしているクラスの見学者が保育を助けてくれるつもりで見えてくると、その日の保育が一層充実する。私は自分のまわりの子どもたちをゆ

っくりと見ることに、そして必要が生じれば交わりを深めることが、保育をしている先生の助けになるだろうと考えていた。

帰りの支度がはじまったころ、お店やさんの看板の前に数人の女の子が集まり、ひそひそ話していた。看板に「おみせやさ」と書いてあり、「ん」の部分に「ん」と記号のよな字が記されている。女の子たちは「おみせやさ」まで読みながら、そのあとが「わかんない」と言う。「へんな字」という子もいる。わきにいる女児がうつむいている。私はその子たちにいろいろと話しかけたがうまく通じなかった。「ん」の斜線部は正しいのだが、曲線部にこだわるので位置関係がおかしくなるのだろう。困難に出会って細部の解決にこだわると全体像が見えなくなるのは大人も同じである。「おみせやさ」まで読めば「ん」という字を補うのは誰にも自然なことなのに女の子たちはことさらにそこを讀もうとしない。字を書けない子どもが拙いながら払う努力を見ようとしな。このような評価する人間観にこそ問題がある。大人が介入してゆかねばならないのはむしろその点であろう。

養護学校では、自我の形成の途上にある子どもたちが、他人のものををつかんで放さなかつたり、そのために押し倒したり、髪を引っ張ったりすることは絶えず起るが、他人を評価したり優越感を持ったりすることはない。その間に入って大人が潤滑油の役を果たせば、子どもたちの活力がダイナミックに働き合う共同の生活がつくり出される。能力も性質も異なった子どもたちが、それぞれ自分で遊べるようにし、互いに相違を大切に尊重す

るように保育するとき、子どもたちの集団は民主的に働き、それが子どもの社会体験となつてゆくであろう。

ここに述べたのは、一日の保育の中でたまたま私が触れたことにすぎないが、そこにも平和の体験の小さな機会がある。平和のための保育は、イデオロギーの伝達でもなく、知識の伝授でもない。それは日常の保育の中でなされる。

フランス語で書かれたユネスコ出版物『平和の種子』は、最近、OME P日本委員会によって、次の題目で日本語で出版された。

『平和の種子を育てよう——幼児期からの国際理解と平和教育』

マドレーヌ・グタール著、荳司雅子監修、OME P日本委員会訳、建帛社

世界の平和のために、親にも教師にも、ひろく一般の人々に読んでほしい書物である。そして、そのつづきを保育の場で実践してゆくことが、世界の平和に貢献する着実な道なのだと思う。

(愛育養護学校)

自由保育の原点を求めて

小川 剛

はじめに

三年前、図らずも、幼稚園にかかわるようになった。それ以来、職務上の必要から、幼稚園関係の事柄に耳目がひきつけられ、また門前の小僧のならいからも、徐々にその知見が加わり、ようやく幼稚園が見えるようになってきた。成人教育学専攻者として、人間の生涯を幼児期から展望できるようになったことは、怪我の功名というべきか。

ここに仰々しい表題を掲げたのも、別に故あつてのことではない。私の所属する園が、わが国における自由保育の発祥の地であり、また長年にわたってそれを守り発展させることを自らに課してきている園であり、そこに身を置く者の基礎的素養として必要なことであると感じるからである。さらに、いわせていただくなら、今日の幼児教育をめぐる状況を打開し、幼稚園を健やかな人間教育の場として発展させていくためには、自由保育こそ

その保育活動の軸に据えられなければならないと信じるからである。

といっても、ここに書かれることは、これまでの自由保育に関する研究成果を博搜し、その慎重な学問的検討にもとづくものではない。筆者のささやかな教育学的素養にもとづき気づいたことを述べたものにすぎない。これらは、すでに、保育者の間では、常識となっており、何ら新しさを加えるものではないかもしれない。しかし、「遅れてきた」ものには、私のように無知な人もいるかもしれない。そのような人びとにいさかでも役立てばという老婆心から、あえて筆をとった次第。ご寛恕あれ。

一、

自由保育というと、幼稚園で幼児を自由に遊ばせる保育形態だと思っている人が、意外に、多い。しかし、その言葉の「自由」は、そのようなことを表わすものとして使われているのであろうか。たしかに、自由保育の形

態をとる幼稚園では、子どもたちを自由に遊ばせている。しかしそれは、目的としてではない。子どもたちのよりよい成長を促すためのいわば方法としてとられていることなのである。すなわち、自由保育を支える理論があって、その要請として、子どもたちを自由に遊ばせているのである。

その理論とは何か。それはフレイベルのそれである。しかし一九世紀前半期のドイツで活躍したフレイベル自身が主張したことだけでは、「自由保育」とはよばれなかったであろう。その後、それに新たな重要な要素が加わったことで、フレイベルの理論は、自由保育に生まれ変わったのだといえよう。フレイベルの理論に「自由」なるものを冠せしめた「新たな重要な要素」とは、二十世紀初頭から、アメリカを中心に、世界的に拡がっていた「自由教育」——より正確には「自由主義教育」——であった。

J・デューイを中心とした理論家たちによって構築されてきた自由教育の理論と実践においては、子どもたち

の自由・自発性・表現・個性等が尊重された。これは、教育と子どもに内在する生命力を伸ばしていく自己創造活動としてとらえるフレーベルの教育思想と原理的に一致する。しかし、「自由保育」の理論は、アメリカにおいて、フレーベルの理論と実践が自由主義思想に照らし、再編成されることで生まれてきたものである。フレーベルの実践のなかには、それが生み出された一九世紀前半期のドイツという社会・政治的条件あるいはかれ自身の認識様式などによって規定されたことから、かれの根本思想と矛盾するような、形式に墮する危険性をはらむものが含まれていた。それらが自由主義教育思想をくぐるなかで、洗い落とされ、二十世紀という新しい精神風土のなかで、本来の伸びやかさを取り戻し、生まれ変わった。それが「自由保育」なのである。したがって、自由保育とは、二十世紀に生きるフレーベルの理論なのである。

二、

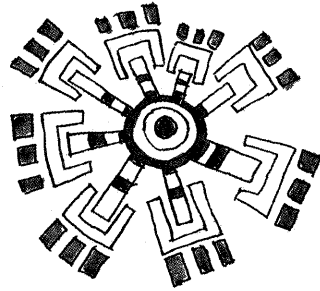
自由保育の意味がわかっただけでは、幼稚園のなすべきことがあきらかになつてこない。そこで、自由保育の成立にかかわつたと思われるJ・デューイに助言を求めると、フレーベルの教育原理の一つとして学校（幼稚園）の仕事は、つぎの三点にあると教えてくれた（「フレーベルの教育原理」、『学校と社会』改訂版、一九一五年所収。以下、これによるところ多い）。

(一) 子どもたちに、お互いに力を合わせ、助け合つて生きていく生き方の訓練を与えること。

(二) 子どもたちの間に、お互いに依存し合つて生きていくという意識が育つようにすること。

(三) 子どもたちがこの生き方を目に見える行為にしている上で必要となつてくる具体的な対応を行つていくにあつて、かれらを実践的に助けること。

ここで強調されていることは、子どもたちが自分たちの努力で社会関係をつくり出し、またそこで生きていく生き方・態度、それに求められる能力の育成である。このことから、幼稚園を専ら幼児の社会関係にかんする態



度・能力を形成する場ととらえ、そのような観点から幼児教育を行っていった場合、大きな誤ちをおかすこととなろう。というのは、このような社会性の重視の主張の大前提を見落としているからである。フレーベル、デュ

ーイとともに、その教育理論において、児童中心主義の立場を貫き、一人ひとりの子どもを教育活動の中心に据えている。子どもたちは、その成長の過程で、内在する力に促され、自らの努力と保育者の適切な助力とによって、独立した個人として生きていくのに必要な態度・能力を形成していく。社会性重視の背後には、このような事実が大前提としてある。

個人に焦点を当てた活動が、社会関係を捨象したところで、持続的に展開されていくとすれば、その結果、独善的な人間が形成され、またその態度・能力も実践性を欠いたものになってしまうおそれもないとはいえない。このような警告が、社会性重視の主張のなかにかくされているといえよう。というのも、人間は、究極的には、社会、すなわちさまざまな人間関係のなかで生きていかなければならない存在であり、子どもの教育も、そこでよりよい成員となり、そこで一定の役割を担っていくことができるようになることをめざすものでなければならぬからである。

個人に重点を置きすぎると、往々にして、社会関係が見落とされがちである。そのようなことから、フレーベルも、デュイも、幼児教育において、社会性の涵養を強調したものと思われる。

三、

J・デュイが、フレーベルのなかに見出した第二の教育原理は、

「すべての教育活動の主要な根は、子どもたちの本能的・衝動的な態度と活動のなかにあるのであって、外部の材料（教材）の提示や応用のなかにあるのではない。したがって、子どもたちの無数の自発的な活動、すなわち、遊び・ゲーム・模倣・幼児のみたところ無意味な動きなどが教育方法の礎石なのである」（前掲書、一一二頁）

というものである。これは、教育活動の主要な源泉は子どもたちのなかにある生得的のものであり、それを出発点として教育活動が展開されるという主張であり、まさ

に自由保育を支えるものである。この自明の理ともいべきことも、人間の教育について考察するにあたって、きわめて重要な意味を帯びてくる。というのは、この主張の根底には、人間をかけがえない生命と個性をもつ存在としてとらえる人間観があり、またそれは、教育の内容・方法を決定していく重要な要因であるからである。

さて、この主張がなされた二十世紀初頭、これと対照的な主張がみられた。それは、いわゆる科学的決定論に立つ教育学者のものであった。ここでは、教育活動を「学校を工場に、教師を労働者に、生徒を生産品に当て、なるべくエフィシエントな操作を経て、多量な教育的生産物の製造」（大田堯『近代教育とリアリズム』、一二八頁）と見立てられた。これは、なにごとも能率本位に処理することを好むヤンキーイズムの産物ともいえるが、二十世紀末、さまざまな教育手法・機器が開発され、「教育」の成果が年商で語られるように「産業」化がすすんだわが国の現状では、益々、支持者を増す可能

性のあるものである。ここにみられる人間観は、人間とは工作者の意思と行動とによって、いかようにも工作しうる無機物に近い存在というものである。生命あるものであっても、その発現したのもも工作者の意思と行動と具体化する契機としてとらえられる。

たしかに、植物は、温室や工場でも、栽培される。しかしそれは、その植物本来の生命と特性を尊重してのことではなく、それらを他の目的とするために利用するだけである。養鶏場のニワトリは、余分なエネルギーを費さないように、両翼は切り取られ、与えられた餌を必要最小限度食べ、不毛な卵を産むことに専念させられる。このようにされたニワトリは野に放たれても、自力で生きていくことができず、のたれ死するという。これは、本来の存在形態を奪われ、他のもの的手段とされたものの悲しい末路である。これは、人間以外の生物の話であるが、かつて奴隷制度下の奴隷の生活も似たような運命を与えられたものだったといえよう。

フレーベルの人間観・教育観は、これと鋭く対立す

る。かれは、人間のなかに、かけがえない生命、そこに統一者・神の存在を認め、「その内的な法則を、その神秘的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが人間の教育である」(『人間の教育』、岩波文庫・上、一三頁)としてい

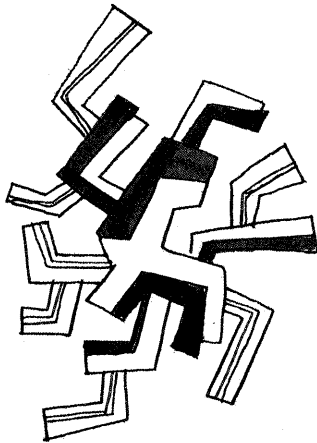
る。このような神秘性に立つ人間観・教育観が、そのままで、現代人に十分納得されるとは思わない。しかし、いかに科学が進歩しようとも、人間存在のなかにある不可知な部分がすべて究明し尽されることはありえない。かりに個々の精神活動が物質の化学変化として説明されたとしても、それらを総合させ、全体的なバランスをとって生命活動を持続させていく人間。貧しさのなかにあっても、真善美の探究という高い精神活動を行っていく人間、その素晴らしさは、畏敬の念をひきおこす。

人間存在にかかわるものは、すべからず、生命の神秘性、自意識をもって自分の人生を創造していく主体者としての人間の尊厳とを肝に銘じて行動することが必要で

ある。フリーベルは、人間形成の出発点にあって、その重要性を再確認しなかったのであろう。その点でも、自由主義教育は共通したものをもっている。

人間形成にあたって、人間に内在する力を効果的に実現させ、判断・行動主体としての人間に求められる態度・能力の形成を図っていく。というのは、それらは、核となるものに、必要な時、必要なものを付け加え、時には、新たな段階に即応するようにそれらを再編成するということを通して、発達していくからである。核のないところには、真の形成はありえない。そしてその核とは、人間の生命を維持・発展させるため、“自然”によって与えられた生得的なものである。この生得的なものを充実・発展させることが、幼児教育の眼目なのである。

(お茶の水女子大学)



第四十二回 乗ること

堀内 守

共感用語

「話に乗せられて」とか「乗りに乗って」などという言葉があります。

「いやあ、あのプランにはすっかり乗せられちゃって……」などという場面にはよくお目にかかります。こういう表現からも推定できるように、「乗る」には一種の共感、共鳴、共動というような面があるようです。

「調子に乗る」「波に乗る」なども同じです。「調子に乗って」おしゃべりしていて、時のたつのを忘れたというような経験はだれでももっている、と思いますが、念のため国語辞典を引いてみて、この種の「乗る」の用法が意外と多いのに驚かされました。「乗りかかった船」「口車に乗る」「計略に乗る」「勝に乗る」「調子に乗る」……。いや、その多いこと。「図に乗る」というようないい方にハッとさせられながらページを追っていくと、「リズムに乗る」などまであらわれてきて、あたりを歩き出すような錯覚を起こします。「インクの乗りがよく

ない」という例文も、「おしろいの乗りがよくない」という例文も、その辞典の成立年代を推定させるに十分でした。

だが、待て。「悪乗り」などというのもありますから注意が必要です。「乗る」にはしかるべき理由があって、何でも調子づくというわけにはまいりません。

そう思って、辞典に載せられている言葉の群れを眺めていると、「乗る」には、クルマや馬に「乗る」というような具体的な「乗る」と並び、もっと抽象的な「乗る」があって、そのうちの「口車」などは「車」があるとはいえ、明らかにクルマではありません。つまり、この種の「乗る」の方は、「乗せる」側に相当手の混んだやり口だの、やり手だのが存在していることを思わせませぬ。他方、「乗せられる」方を考えてみると、人間という存在の「お調子者」性や「おっちょこちょい」性が見え見えになってくるのです。

特定な人間だけがそうなのではない。どんな人も、ほめられれば得意になり、おだてられ、おだてに乗るとい

う面をもっている、といったら過言でしょうか。

「ちびっこ」という言葉

だれがはやらせたのか知りませんが、この「ちびっこ」ということはあまり語感がよくありません。からかっているのやら、ほめているのやら、おだてているのやら、わけのわからぬところがあります。子どもたちの自称でないことはたしかです。

まこと、哀しい、無責任なことばで、「ちびっこ」の風景は「ちびっこのど自慢」だの、「ちびっこ向け怪獣ショー」というようなものから「ちびっこ〇〇コンテスト」というような薄っぺらいものが多いのです。

そこに見える「薄っぺら」の根拠は、その前提に「子どもなんて、このくらいで乗ってくるさ」という発想が透けて見えるからです。一回きりの、無責任な催し物をやって人集めをする。その手段として「ちびっこ」を使っているのですね。そういうコンタンに対しては批判的に対応しておくことにしようではありませんか。

見本を若干おめにかけておきます。

▲某月某日、「ちびっこ潮干狩大会」が某所の広告に出ていました。はて、と思つて読み進みますと、以下のごとき条件が付されています。毎日、先着、百名様入場無料。ただし三日間だけ。

「入場」とあるからには浜に囲いでもするのか殺風景な、と思つて、その先を読んでまた驚かされました。何と、この「潮干狩」は、某スーパーマーケット内で行われるのでした。いくら何でも、これでは「潮干狩」が泣きます。「毎日」とうたつてあるにもかかわらず、「三日」がすぐあとに出てきますから、錯覚を起こします。三日間しかやらないのです。

念には念を入れ、ある一日、某スーパーに出かけてみました。「ちびっこ」たちとママさんたちはたしかに集まってきました。列をつくつて待っています。係の人が順番に番号札をくばります。「九十七、九十八、九十九、百！はい、ここまでエ……」というあたりで「ワー」という歓声があがりました。あとはジャット・ア

ウト。「どうか明日お越し下さい」。

砂場を利用したまやかしの潮干狩は、始まって三十分ももちませんでした。

結局、「ちびっこ」は、ママたちをここに集めるための記号に過ぎないことがわかりました。臨時につくられた砂場には小さなオモチャが隠されていて、それを「ちびっこ」とママたちが汗を流して見つけ出すというオソマツ。

見ている側が砂に小恥かしくなるシロモノでした。

▲これとくらべたら、某商店街が二か月に一回催す「ちびっこのど自慢」の方が小っ恥かしくないだけ、安心して見ていられます。カラオケで「のど自慢大会」をやったら、判定をめぐつて大立まわりが起きてしまい、それ以後は「ちびっこ」に出してもらい、おとなはもっぱら応援にまわる由。時刻は六時から九時まで。延三時間。一人平均三分で終わるから短かい歌ばかりだな、と思つたら、ある専門家が教えてくれました。「演歌は大部分三分以内で終わるよ」と。いわれてみればそのと

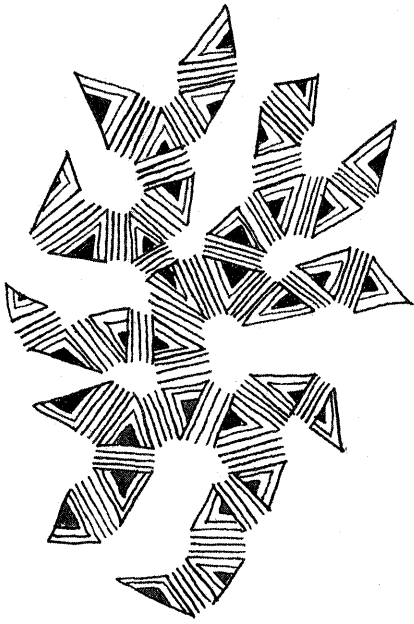
おり。

「ちびっこ」といってもすさまじく、三歳の子が「あなた、別れ、いとし、雨にぬれ、涙……」などのことが並んだ演歌を切々とうたいあげたときは、まわりの応援者たちもシーンとしていました。正調の民謡かうたわれ、落語や漫才や物まねなども登場し、みごとなものだと感心させられます。が、何といっても見どころは、「次は○○ちゃん。張り切ってどーぞ」と司会を演じる「ちびっこ」です。だれに向かっても「張り切ってど

ーぞ」を連発するものですから、どこまでいってもワンパターンです。しかし、その司会の手ぶりはおとな顔負けでした。

一時的な驚きづくり

「ちびっこ」ときたら、だいたい以上のような文脈が出現する可能性が大了。小細工、おあそび。跡を見れば、その空しさは一目瞭然です。ピントが合わせにくい被写体たる子どもを、あらかじめ合わせ易いものに加工



しておき、その枠内でしか企画を立てていないからです。

「ちびっこ」「ヤング」「OL」「ミセス」……「シルバ
ー」。何やら上ついた記号が飛び交っているのがわかり
ます。しかし、これを性急に非難することはやめておき
ましょう。性急に非難することよりも、少々ねばり強く
その群とつき合ってみるのです。

まず指摘できることは、「ちびっこ」が何かの「呼び
水」として使われていることです。購売直結のための顧
客動員手段、客の固定化、組織化へ向かう志向が「ちび
っこ」というやんちゃな表現をつくり出したのでしょ
う。子どもも、この「呼び水」に対し、一時的に興奮
し、乗ったことは否めません。

次に指摘できるのは、「ちびっこ」の音おんの面です。こ
れは明らかにもじりです。アダナに近いのです。その音
は、いろいろな連想を可能にします。ふくらんでいきま
す。ひとそれぞれが「ちびっこ」に、あるイメージを加
えていき、服装、行動様式までそのイメージにふさわし

くつくりあげていきました。

「ちびっこ」は、現実の子どもたちをもとにつくりあ
げられたイメージではなく、そういう見方の枠だったの
です。焦点の合わせ方でした。だから、「ちびっこ」と
いう見方を通して見ると、どの子も共通にちびっこらし
く見えたのでしよう。

第三に指摘できることは、「ちびっこ」には時間が繰
り込まれていないということです。子どもや、童などが
進行形の「大きくなれ」という志向でとらえられている
(その証拠に「大きくなっただね」がほめことばに使われ
る)が、「ちびっこ」はそれを欠いている。「ちびっこ」
はちびっこのままなのだ。永遠のピーター・パン!
以上、少し誇張して「ちびっこ」の特徴を挙げてみた
のですが、この先、追い追いの「ちびっこ」を「奥の
手」を使って修正してみようと思えます。

間*

生ま身の子どもたちを相手にしていると、間*がいかに

大切かを思い知らされます。つまり、タイミングのことです。

これを考慮にいれずに、いきなり子どもに向かっていくと、予想に反して子どもは相当したたかなので、わずかのあいだに疲れてしまう人が少なくありません。いきなり、素手で飛び込んだようなもので、どうしていいのかわからなくなってしまふ。

事前の準備が大切です。

既成の概念と固定観念を破るには、あの「ちびっこ」の分析のように、ごく小さな話題を取りあげて、いろいろな角度から論じてみる必要があります。肩ひじをはずし、リラックスして。

いきなり「子どもとは何か」などを大上段にふりかぶらない方がよろしい。

少々理屈っぽく響くかもしれませんが、下手をする
と、いや、ややもすると、「……とは何か」という問い
の立て方は、変な方向に向かって走り出しかねないから
です。むずかしい哲学談義は止めて、この問いの隠れた

仕組みを「奥の手」で正体を明かしてみると、左のよう
になります。

▲「……とは何か」は、多くの場合、答が一つあると
予想されている。せっかちな人は、この答が「……とは
Xである」というように簡単明瞭な答が出てくるのを期
待している。

▲もう少し悠長な人は「……とはXであり、Yであり
……」というように、いくつかの答を列挙する。(あれ
でもある、これでもある。あれでもない、これでもな
い。)

▲もう少し慎重な人は、この問いだけを見ずに、その
問いを問うている自分に向かい、「なぜ、このような問
いが出てきたのか」と考える。すると、状況だの、実存
だのが問題になってくる。

▲簡単に答が出ないと予想している人は、自分だけで
考えずに、だれかに向かって、「いっしょに考えてみま
せんか」と呼びかける。

このことよって、考えるということはゲームのよう

に、劇のように変わっていく。うまくいくと、考えることが面白くなる。

モノからコトへ

おわかりでしょうか。

同じ「子どもとは何か」という問いでも、右から左へ移るにつれて、その問い方が変わっていききました。のみならず、にぎやかさも増していき、考えることができごとくに近くなっていきました。

これを「モノからコトへ」と表現しておきましょう。

私たちは「子どもとは何か」という問いを立てるとき、いちばん素朴なレベルでは「何という大げさな問いだろう。子どもなんて、ここにいないじゃないか」という声がどこからきこえるように感じるはずです。そのかぎりでは、「いま、ここにいる」子どもが答です。

でも、その素朴な感想は、ふたたび動きはじめます。

「こんな素朴な答じゃいけないのかな。そういうえば、あの問いはヨソユキで、並の答では満足しないようなイカ

メシイ顔つきをしている」などというギモンをきっかけにして。

ここでひとつ、単純な表現をしてみましょう。二つ並べて、黒板にでも、紙の上にでも、砂の上にでも書いてみてください。

子どもというモノ。

子どもというコト。

違っているのは「モノ」と「コト」の部分だけです。これがやがて相当のヒラキを示すはずです。さて、「子どもというモノ」の「モノ」は、「物」や「者」を超えた「存在」です。もっとくだけていえば、「子どもでもアルとはどういうコトか」。「子どもでもアルとはどういうアリサマなのか」。「子どもでもアルとはどういうことデアルのか」というように「アリサマ（有様）」をたずねていることであるのに対し、「子どもというコト」を問う方は、「子どもというコトは何をスルコトか」と、「スルコト」を問うているのです。

「子どもというモノ」は、余分なところを除いていっ

て、純粋な答えを求めるのに対して、「子どもというコト」の方は、にぎやかな、多様な面をとらえようとしません。

沈思熟考と討論の違いといってもかまいません。

「子どもというコト」の「コト」は「デキゴト」の「コト」と同じです。ですから、意外性があり、娯楽性もあります。このコトを重視したいと思います。

コトの中心

子どもというコトという観点は、子どもがどのようなツール（道具）を介してできごとをつくり出していくかという観点が入っています。もちろん、ここにいう「道具」は、あらかじめ道具としてできていないものでもかまわない。棒切れだって、ちゃんと大道具、小道具、持道具に仕立てあげてしまうのですから。

この「道具」がいかにできごとをつくり出すことでしょうか。その場合、子どもにとっても、それを見ているおとなにとっても、コトは四つに分類可能です。

一、意外さ。おや。あら。ほう。

二、造反さ。常識への挑戦。

三、感動性。ワァ、驚いたなあ。

四、独創性。そんじょそこらにないな。

これらの四つがたえずつくり出されているのがデキゴトです。「出・来・事」とはまことにうまい表現ですね。「事」がつきつきと「出て来る」のですから。哲学ではこれを「現前」などと呼んでいます。そのむずかしい定義よりも、「出・来・事」とか「出来事」のように「間」をとってみるの方がピタリでしょう。

また「子どもということ」という観点は、子どもがたえず交渉し、交流し、交換し合っているコトに注目します。他の物と、他の人と。このとき、交換されているのがかりに何かの物であっても、その物は単に裸の物としてあらわれているのではなく、何らかの意味を帯びていることを見のがすべきではありません。

いささか気取った言い方をお許しただいて、そのコトを表現し直しますと、その物は交換されるなかで、メ

ッセージを発信しはじめるのです。

ひとつの石ころが渡されたとします。もちろん、「これあげる」などという表向きのメッセージも交わされることでしょうが、深い層では「仲よくしよう」というメッセージとなっていたり、「君だけにあげるのだよ」という格別のメッセージだったりするのです。

コトの中心にはこういう仕組みがあって、私たちに驚きや新鮮さを贈り届けてくれます。

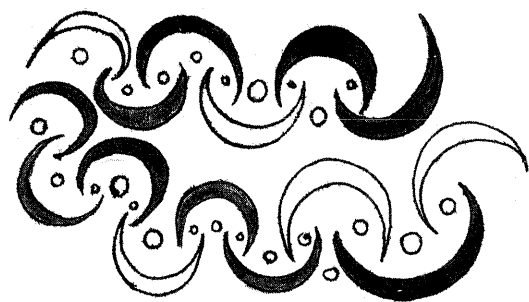
ことばの発掘

何かに夢中になっていることを、没我の境地にいるとか、ほかのことが目に入らないというように表現する。没我も無我も宗教的意味に通じているが、子どもというコトを見ていくと、子どもは無念無想とは反対で、無心である。修行を経ずとも無心でいられる。

ひとりごとが口をついて出る。つぶやきがひとりごとに出てくる。それを取材して整理してみると、思いがけない仕組みがあらわれてきた。いったい、こんなことがあ

っていいものか、というような高度なひとりごともある。ば、笑いを誘うひとりごともある。

砂に刻もう。どこからがボクの国かな。ブルドーザーでマンションをこわします。おうちが広くなりました。ええ、いつでもどうぞ。アヒルの洗たく屋です。チリ紙交換車がやってきました。みどりを通ってくる風。デザインがいいよ。



これはいったい何なのか、考えてみてください。

詩ではないし、CMでもない。台詞のようにも見えてくるではありませんか。もう少し続けましょう。

白い風。君の耳は柏もち。横着者めが。うつろなノンタン。ウソっぽっち。ボロンポロリン。この先まっくら。盛りあがりました。幸せいっぱい腹いっぱい。お安くしますが。あなたのせいよ。やりすぎハッター。なさないはなし。中年ライダー。

こうなりや、やるだけよ。しょがねえな、こいつ、おとなしくしろ。釣れたか、釣れぬかはもう古い、いまはリールと語り合う。着地準備オーケー。応答ねがいます、応答ねがいます。やったな、こいつ。キライ！もうイヤになった！限界だ。

おだやかでない表現も結構多い。しかし、いかがでしょう。これらはことごとく交換のパイプがどのようなものであるかを示していますし、交換の場の構造を暗示しているようです。

「やったな、こいつ」は、ことばどおりであることも

あれば、親しきの表現である場合もあります。仲良く遊ぶながら、ことばの上では悪態をついているようなグルーブも少なくありません。乗りに乗って調子づいているときにはもっとものすごい表現が交わされていることもあります。

わたしの心のアンケート。チャンピオンのさすらい。みんなで歩いていくんだ、家が見えなくなるまで。

乗りに乗ったこういうつぶやきの中から傑作を三つお目にかけます。

「季節はずれの蝶、ガラスを気にして、びら、びら、びらり」

「これだけ、もうこれだけ。いつもよりお安くなっています。お子さまにどうぞ」

「さあて、みなさん、仲よくいただきます。みんなハイですか。ハイ」。

「ちびっこ」どころか。多様で、おとなびていますね。

(名古屋大学)

子どもと(7)

十月・青空を仰いで

清水 光子

「何て青い空！」園庭に出て仰いだ空のあまりにも青いのには、年甲斐もなく大声を出してしまった。外靴にはきかえていた子ども達がつられたように空を仰ぐ。都会のまん中の区切られた空でも、まっ青に、深い広がりさえ感じられる。東京オリンピック開会の日のあの青空を思い出す。

そして、何にも増してこの空と一体になった巨樹へのおもいを謳うたわれている倉橋惣三先生の「育ての心」の中の「十月」を繰り返し思い出す。

「秋は園の（お茶の水女子大学附属幼稚園）丘の大銀杏樹のてっぺんから来る。」という書き出しから、ぎんなんの丸い実が一日一日色づき、ある夜の風に落ちる、しかし限りないときえ思われるなお残る数、やがてその葉の色が次第に黄色色になってゆく様子を簡潔

にしかも美しく描いておられる。私も十数年、朝夕仰いだ樹なので、一人思い深いのであるが、巨樹を讃えるその謳の「朝日を迎えて輝く光、夕日に映えて照る光を思わずとも、澄みきった碧空に、燦として聳立している真昼の雄姿の神々しいことよ。私たちはその樹の下に子どもらといっしょにいて、偉いなるものの中にいる小さきものの心を、寸差を捨てた虔しさに感じさせられるのである。有難いことは仰ぐものをもつことである。」という結び。私はこれをほとんどそらんじていて、くちずさむ毎に胸にひびく感動を抑えることができない。

今年の春早く、ぶなの、樹齢数百年の大木をその原生林に訪れ、霧のような、霞のようなやわらかい、うす緑色のベールの中の稚い葉のささやきをきいた。おなじ林に夏、六月訪れた。夜明けで、うす紫の光の中で大木の若葉が生命の力をわき立たせているようなざわめきをきいた。そして感動で身ぶるいしたが、十月の今、あの巨樹はどんな姿だろうかと思う。きっと、堂々と輝かしく、あらかた黄葉した葉に装われ、静かに雪に静もる日を待っているのだろうか。こうして私たちは偉いなるものからの贈り物を一ばいに享けて十月を迎える。ドングリ、椎の実、栗、栃の実など。それぞれの命を次の世代に伝えているのだ。それにしても碧空にはえる柿の実の何という見事な配色だろう！

野の川は冷たさを増しながら、とり入れのすんだ田のふちを空をうつしながら、青い海に吸われる。

土曜日曜祭日というと決まって朝早く行進曲が町を流れてきこえてくるのも十月であ

る。「ただ今、マイクの試験中、本日は晴天なり」などとも。あれは今もおなじなのかしら、など面白く思い、青空のもとでの運動会、体育祭に声援を遠く送るのである。

戦後間もない頃、或る地方都市で私が子ども達と経験した運動会を思い出すと、今でも快い感動を覚える。小学校の運動会であるけれど、町をあげてのお祭りという雰囲気、農家の多いその土地でもその日ばかりは年よりから若い人達まで、もちろん幼い人達も、早くからグラウンドのまわりの少し枯れかけた草の上にむしろを敷き、その上に重箱につめたおべんとうを持ちこんで、子や孫や、隣の○ちゃん達に声援を送り、お昼には楽しい、青空のもとでのパーティである。○ちゃんのおばあちゃんに貰った大きなおはぎのおいしかったことが忘れられない、と私の次男は大学生の頃言った。

このようなことが教育上是非かをあげつらうのはさておき、学校・園の行事は地域との関わりを大切に、地域らしさを大いに盛りこんでやりたいものと、そして、地方文化を残すような方向へのきっかけにしたらいいな、と私は思っている。何しろ、楽しい行事がいい。それは知識として教えられたものより、思い出として心の中に深くしみこむからだ。子ども達の人間性の善なる部分に深く関わるのではないか、小柄なUちゃんがリレーに出た。走って、一人抜いたらころんで、すりむき、血を流しながらも懸命に起きて走ってバトンタッチした。その姿、まわりの声援。私の大人の目、耳の底にも今でもはつきり残っている。

元、高校の体育の教諭だった星野富弘さんは体育の指導中、思わぬ事故で首から上以外

のあらゆる感覚を失い、車椅子の生活を十数年続けられている。氏が口で絵と字を練習してつくられた『四季抄・風の旅』という詩画集をこの一月、第七四刷目を出された。その中の「きんもくせい」の絵に添えられた詩。

冬服に着替えた日

ほのかなやさしさが

私をつつんだ

それは樟脳のおいだった

運動会を見に来てくれた母の

装った母の

きものの裾すそのおいだった。

園外保育や遠足は、十月の子ども達にとってどんなにか楽しいことであると思うのだけども。嬉しくてその前夜は眠れない、というのは昔の子どもだけだ、というささやきがきこえて愕然とする。が、大体の子ども達は新しい経験の期待に胸をふくらませると思うし、それを裏切ることのないような大人の配慮が充分であるようにと願わずにいられない。天候ばかりはどうしようもないけれど、そのために何等かの事故が起きたとしたら？ と心配症の老婆はさがりがなく案じてしまう。ほんの小さなことが子どもに大きな傷をつけ

ないように、事前踏査、下見研究、準備を細心緻密に、そして、子どもとは青空のように大らかに、と。大へんむずかしいことだけれど……。下見のときはたしかにあった公園のトイレが、修理のため使えなかった、ということも経験した。臨機応変の処置も必要になる。大人の柔軟な対応が求められる。

そんな緊張した大人は、つい口やかましくなったり、こわい顔して叱ったりしてしまう。普段あんなにやさしい先生が？と子どもは戸惑うことだろう。何しろ目の届くところに統制して行動するということから動物園へ行って、子ざるが母ざるにしがみついて、あちこちしているのみにとれていたら、「Tくん、ぼんやりしないで歩くのよ」といわれた。ラッコの泳ぎがあまりうまいのと、水の上に出たときの大きな丸い目に魅せられて立ち止っていたら「M子ちゃん、前があいてるよ」と声が飛んでくる。

遠足はいいけど、あとできっと絵を描かされるから行きたくない、と絵が苦手のN君が言ったという。芋掘りで、虫が好きなYちゃん、土の中の虫を懸命に探していたら「Yちゃん、君、何してるの。早く、大きなお芋沢山掘ってよ」これは叱られたのではないけれど、Yちゃんは心満たされたかな？と思う。

保育の中の行事の位置づけなどさまざま研究されているようであるが、いつか、本田和子先生が、「保育の流れの中で或るエポックメイキングな意味もあるのではないか」と言われて、鈍い私の心は眼をさまされた思いが出がした。お遊戯会を機として表現力が高まった、園外保育で、自立ができるようになった等々プラスの面が語られるけれど、一方マイ

ナスの面もあるのではないか、一人ひとりの子どもの心にとって、と疑い深い私である。急に昨夜は冷えた、という山の宿で、起きてみたらぐっと紅葉の色が鮮やかに山を被っていたという経験もある。一とき一ときの保育の、環境のつみ重ねが精巧な織物よりもっともっと精巧な子どもの心につくるひだの多い美しい綾錦を思うとき、何かにひれ伏したい気持ちになってしまうのである。

瘦馬の あはれ機嫌や 秋高し

村上鬼城

青い空のもと、外へ出よう。十月の清々しい空気の中を！ というので、戦後間もない頃、幼稚園児の末子と上の小学生の子どもらと小ハイキングをしたとき、短い秋の日が落ちかかり、私は早く帰らねば、と気がせて効外電車の駅までを叱咤激励して歩かせていた原っぱの中の道で、「もう歩けないよ！ 疲れたよ！」と座り込んでしまった末の子、「だめよ！ さあ、立って歩きなさい！ お兄ちゃん達もうあんなに先へ行ってるでしょ、さあ！」と言ったが、歩こうとしないでベソをかく彼にいらいらして腹を立てた私、「じゃあ、○ちゃんはここで野宿しなさい！」と言って歩きはじめた私を、彼は泣きながら追って来て、私の手につかまってやっと駅に辿りついたことがある、「野宿」ということばがどんな意味か、とにかく誰もいないところに置いてきぼりにされるといふ恐怖が彼を立ち歩かせたのだろうか。以後、可成り長い間、いろいろな場面で野宿する、ということばが我家

のはやりことばになった。母親である私はそれをきく度に後悔しきり、はずかしさ一ぱいであった。

電車の中やパートの人ごみの中でなきわめいている幼児に手こずっている大人達を見ると、その関わりの人たちだけでなく、見ている大人達の表情や態度に興味をひかれる。近頃つきあひを持った若い両親は、パートで我子をわざと迷子にしてみるのだという。自立心を（未だ三歳の女の子）を鍛えるためという。本当に迷子にするのではないのだけれど、誰にでもすすめられることではないな、と思っけきた。

前記の星野富弘さんの、野菊のような白い小さな菊の花に添えた詩に

よろこびが集まったよりも

悲しみが集まった方が

しあわせに近いような気がする

強いものが集まったよりも

弱いものが集まった方が

真実に近いような気がする

しあわせが集まったよりも

ふしあわせが集まった方が

愛に近いような気がする

紅葉を尋ねて山歩きをしていたとき、オリテンテリングの若い一団にゆきあった。中の一人が、転んでくるぶしをくじいたと足を引きずり乍らも友達に支えられて必死で急いでいる。その人達に道をゆずるとき、同行の老齢の男性が叫んだ。「がんばれよ！ 二十一世紀は君たちにまかせるぞ！」

あんなおじいさんが作ったのかと

おもうなかれ 君らの声を歌にしたまで

(校歌という題で 土岐善麿)

老深く 覚えし言葉ベレストロイカ

若さらに明るき未来あれかし 遠藤千秋

(七月九日朝日歌壇より)

秋まったただ中、人も動植物もみのりのまったただ中、私老婆は若きものに、稚きものへ、心をこめてよき充実みのりをと心から祈るこの頃である。

(音羽幼稚園)

昆虫の世界

夏から秋へ ①

小島 賢司

私が豊島園で昆虫館の仕事をするようになって8年になる。子供の頃から昆虫に親しみ、昆虫について少しは知っていたが、仕事で採集や飼育をするようになって、より深く、昆虫を理解するようになった。とはいえ、昆虫の世界はあまりにも広く、まだまだ判らないことのほうが多いのだが……。

ご存じのように、日本には四季があり、季節の移り変わりに合わせて、自然は装いを変えていく。昆虫の世界も同じで、四季折り折り見られる昆虫の種類は変わっていく。この、季節の変化を巧みに利用して、昆虫たちは暮らしている。夏の雑木林の王様、カブトムシや、盛んに鳴いていたセミたちは、今、どうしているのだろうか。秋を盛りと鳴く虫たちの世界はどうなっているのだろうか。これから、ちょっと紹介してみたい。

子供たちの昆虫に対する関心が高まるのは、なんといっても夏である。夏には、子供たちに人気のあ

る、カブトムシやクワガタが見られるからだ。昆虫館の事務所は、「昆虫なんでも相談室」を兼ねており、夏には、子供や親子連れの質問者がたくさん訪れる。質問の内容はカブトムシ、クワガタについてが圧倒的に多い。採りたいけれど、採り方がわからない。どこへいけば採れるのかわからない。飼い方がわからない等である。都会の子供たちは、昆虫の知識は豊富なようだが、実践が伴っていないようだ。また、若い親たちも虫採りをせずに育った人が多くなってきて、子供に教えられないようである。

私が子供の頃、虫たちは良い遊び相手だった。空箱を持って街はずれの雑木林へ行けば、カブトムシやクワガタは箱一杯採れた。リングゴ箱に網を張った飼育箱を作り、中で飼ったり取り出して遊んだりした。オス同士向かい合わせて相撲を取らせたり、マッチ箱で車を作って引っ張らせたりして遊んだ。三十年前の話だが、その頃の体験があるので、今でもいそうな場所はすぐ判る。小学生の息子がカブト

ムシを採りたいと言えば、一緒に採りに出掛ける。虫採りの時だけ、息子は私に敬意を表してくれる。

カブトムシは、夏の雑木林を代表する昆虫である。クヌギやコナラの木の樹液を吸いに集まってくる。オスには立派な角があり、戦いの道具になる。オス同士が出合うと、角を突き合わせて戦い、相手をほうり投げた方が勝ちとなる。勝ったオスは餌場を独占し、やってきたメスと交尾をする。しばらくすると、メスは土の中に卵を産み始める。卵は1粒ずつ、土を固めた小さな丸い部屋に産み込まれるが、自分の卵を大切に扱う母親の心遣いが感じられる。卵は最初、長径3mm程の米粒状をしているが、土中の水分を吸収し、孵化間近になると、直径4mm程の球形になる。孵化した幼虫は、腐植土を食べて成長し、秋の終わり頃までに、2回脱皮して三令幼虫になる。秋に、質の良い餌をたくさん食べてどれだけ大きくなれるかで、成虫の大きさにも差が出るようだ。幼虫にとって良い餌とは、農家で作る堆肥

のように、落葉をたくさん積んで腐らせたものである。堆肥の中は秋でも発酵熱でとても温かいので、幼虫はほとんど育つ。これに対し、立ち枯れや切り株に入った幼虫は、餌が乾燥していたりすると大きく育たないことがある。やがて、冬が来ると幼虫の動きは鈍くなるが、少しは餌を食べているようだ。

春が来て暖かくなると、また活発に食べ始め、六月頃、土の中に蛹室を作って蛹になる。二〜三週間経つと、蛹から羽化し、カブトムシになる。一週間程度蛹室に留まった後、地上へ出て活動を始める。カブトムシは、一年で一を送る訳である。

クワガタの仲間は生活が多様化していて一概には言えないが、夏が終わるとすべて死んでしまうノコギリクワガタやミヤマクワガタと、オオクワガタ、ヒラタクワガタ、コクワガタのように、一部のものが成虫で冬越しするものがある。コクワガタのメスは、夏の間には適当な朽ち木を見つけ卵を産む時、メスは短いキバのような口で朽ち木をかじり取り、



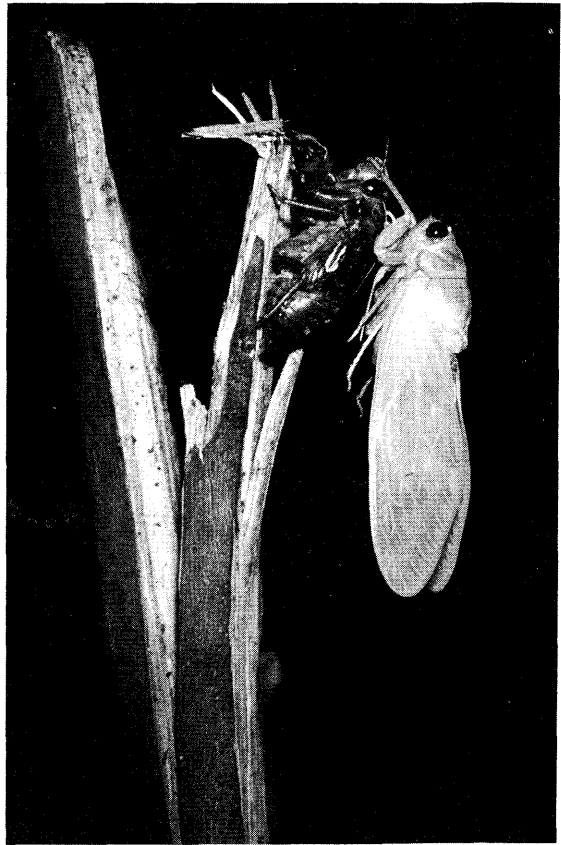
▲カブトムシの幼虫



▼コクワガタの幼虫

そこに、卵を一粒産み込むと、その穴に木屑を詰めて埋め戻す。このようにしていねいに卵を産んで行くので、産卵数はあまり多く無いようだ。卵は二〜三週間で孵化し、一令幼虫は、周りの朽ち木を食べ始める。少しずつ食べ進んで行くので、食べた後が木屑やフンの詰まったトンネルのようになる。これを虫屋（昆虫

を研究、採集する人種）は坑道と呼び、クワガタの幼虫を探す時の手掛かりにする。朽ち木を崩してクワガタを探す場合、坑道をみつめて、それをたどっていけば幼虫がみつかる。時には、蛹や成虫が出てくることもある。秋の内に一回目の脱皮をして二令幼虫になり、最初の冬を越す。冬の間は坑道の中で



▲羽化して羽をのぼすアブラゼミ

じっとして過ごし、春からまた朽ち木を食べ始め、やがて三令幼虫になる。朽ち木の中にカプセル型の蛹室を作って蛹になり、二〜三週間経つと成虫になる。しばらくすると体は堅くなるが、外に出て活動しようとはしない。蛹室の中で二度目の冬を越し、五〜六月頃、やっと朽ち木から出て活動を始める。

成長の遅れたものは二度目の冬も幼虫のまま過ごし、三年目の初夏に蛹から成虫になり、すぐに活動を始めるものもある。このように、コクワガタは卵から成虫になるまでに二〜三年かかる。クワガタの仲間は幼虫の育つ環境によって、成虫になるまでに四〜五年かかるものもある。

これよりもっと時間をかけて成長するのがセミの仲間である。セミは短命で一〜二週間の寿命と言われ、命のはかなさを感じさせるが、それは、成虫についてのみ言えることで、その一生は昆虫の中では長い部類に入る。アブラゼミは真夏に出現し、オスは「ジリジリジリ」と暑さを増長させるような鳴き方をする。鳴き声に誘われてやってきたメスと交尾が行われ、交尾を終えたメスは枯れ枝に卵を産み込む。大切な役目を終えたセミは死んでしまうが、産み付けられた卵はそのまま冬を越す。六月の梅雨の頃、卵からかえった幼虫は地面に落ち、土の中に潜って木の根に取り付く。幼虫の口は針のようになっ

ていて、それを根に突き刺し、樹液を吸い始める。ここから長い土中生活が始まる。木の根から樹液を吸って徐々に成長し、四回脱皮して五令幼虫になるまでには、五年もの長い時間を必要とする。夏の夜、地面に穴をあけ、地上に這い出した幼虫は、羽化場所を探し歩き、適当な木の幹や葉をみつめて静止する。やがて幼虫の背中が割れ、中から真っ白なセミが出て来る。数年前、家で家族と、息子の友達、その母親を招いて、セミの羽化を観察したことがある。皆一様に感動していたが、友達の子の母親が一番興奮していたのを覚えている。大人にも、セミが誕生するシーンは、深い感動を与えるようだ。アブラゼミは、卵から成虫になるまで七年かかるが、他のセミの生活は、まだわかっていないものが多い。

つづく

(豊島園昆虫館)

子どもの領分

国吉 栄

子どもの頃、「子どもの領分」というピアノの練習曲を弾いたことがあります。なまけ者のせいで、ピアノは全くものにならなかったのですが、その曲名と、楽しい響きを覚えています。おそらく、子ども向けにやさしく編曲されたものでしょう。子どもの笑う声がコロコロと聞こえる、そんな曲だったような気がしますが、記憶違いでしょうか。

もうずい分前のことになりましたが、保育の勉強を始めたばかりの頃、子どもの空間表現に関して、とても印象に残る場面に出会ったことがあります。空間表現とはこねない言葉ですが、子どもの「領分作り」と言い換えてもよいかもかもしれません。ある幼稚園で保育観察をさせていただいた時のことです。

ある日、一人の男の子が友だちと一緒に紙飛行機を作っていました。特別に良く飛ぶようにと工夫をこらし、時間をかけて作ったものでしたが、すべり台の上から飛ばしたところ、彼の飛行機は、遠くまで飛んで、植え込みの中に落ちました。急いで拾いに行ったのですが、一足先に他のクラスの男児に拾われた後でした。彼はすぐに気がついて、その子の後についていきましたが、結局、何も言わずに引き返し、一人で部屋に入ってしまった。上ばかりにはき換える前に、下を向いて黙って涙を拭いています。部屋に入ると、ブロックで小さな飛行機を作り、そっとヒーターの下に隠しました。私は、彼が傷ついた心を、ヒーターの下の暗い密やかな所にそっと隠したことに心を打たれました。そこでは、誰にも侵入されず、傷つけられず、安全に自分を保つことができるのです。

ところが三学期のことです。その子どものクラスでは、画用紙に色を塗って立体的に作る電車作りが流行っていました。彼もその一人でしたが、その日は、作るだけでなく、つなげることに、しだいに熱中したようでした。何台も何台も、机に戻っては電車を作り、つなげ、また作る、というようにして、椅子をよけ、机の下をくぐって、ついに保育室一杯に広げて電車をつなげてしまいました。いつも遠慮がちな彼が、こんなにも意欲的に、生き生きと自信に満ちて動いている姿を、本当にまぶしく、そして、うれしく感じました。そう感じたのは私だけではなく、そのクラスの先生も同じだったように思います。何しろ、彼は何枚も何枚も新しい画用紙を使い、しかも途中からは、クレヨンを塗るのももどかしく、とにかく電車の型に折りさえすれば、という状態だったので、大人なら誰でも、「もう少ししていいいに作ったら?」とか、「もう沢山作ったから、今日はおしまいね」とか言いたいところだったので。しかも誰はばからず、保育室中に広げてしまっ。私は、この日の

彼のこの作業が、彼にとって重要なことであると感じていられたからこそ先生はそれを黙って見ておられたに違いないと思いました。本当に彼の生き生きとした様子は、保育室中を巡る電車の円環の大きさに、よく似あっていました。

ヒーターの下の暗い空間と、保育室中に広がる空間。私は、子どもが、自分の思いや姿を、自分が生きている空間の中に、それを「所有する」という形で、具体的に表現することを、彼によって教えられました。彼の「領分」は、ついには広々と、しかも他の子どもたちとの共有の場に広げられていったのです。

昨年、私は子どもの「領分作り」について、ずい分考えさせられました。昨年の秋以降、私の園では子どもたちが椅子や机などで囲いを作って遊ぶことが目立って多かったです。しかも、それがとても排他的に見えたり、高圧的に見えたり、空虚に見えたりする面が強かっただけに、とても気になったわけです。「領分」とは、辞書によれば、①所有地の内、領地内、②勢力の及ぶ範囲、また、自由にできる範囲、ということですが、子どもたちは文字通り、自分たちの領分作りをしていたのでしょうか。

狭い片すみに机を横に倒して、あたかも玉よけ盾のように並べ、さらにその外側を椅子で取り囲んで、堅牢な「要塞」を作った子どもがいました。その囲いの中に机を一つ、椅子を二つ置いて、友だちと二人で絵を描いていました。「みんなは入っちゃダメ。先生はいいよ」。その中で二人は全く同じ絵を描き、私も同じ絵を描かされました。その中は、すべての要塞がそうであるように、内輪の、親

密な者同士が肩寄せ合う場であると同時に、常に外部からの侵入者を恐れ、身構える、緊張感が満ちていました。

別のところには、椅子を沢山集めてきて並べ、他の子どもと争ってまで集めてきたお皿やお鍋やブロックやボールなど、山のように家財道具を蓄えただけで、それらで遊ぶでもなく、広い囲いの中でつまらなさそうに腰をおろしている子どもがいました。囲いの中を、豊かに物で満たそうと苦闘したのに、豊かになれないのです。

また、部屋の側面を利用して椅子を大きな半円に並べ、その中でフラワープをしたたり、ただただ余っている椅子や机を総動員して、とにかく広く囲もうとしたり、時によっては保育中の机や椅子が、囲いとして並べられるためだけに使われたこともありました。昨年の秋からは冬にかけて、このような光景が連日繰り返されていました。

子どもは自分の領分に非常に敏感です。敏感という以上かもしれないかもしれません。私の園は四年前に保育の方法が変わりました。それまでは座る椅子や机が決まっていたのに急に自由になった時、子どもたちは、うれしさより不安の方が大きいようでした。いつまでも裏に自分の名前が書かれた椅子に執着していました。枠にしばられないで行動するには勇氣が必要です。そこにいれば自分の場所は安泰だったのに、へたをすると自分の居場所がなくなってしまうかもしれないという危機感があったのです。不安が強ければ強いほど、古いものにしがみつくようでした。赤ちゃんは、自分のために確保された母親の腕の中に身を置いて、未知の世界を開拓していきます。たとえそこで混乱しても、母親の腕という安全な囲いの中で、安定を取り戻すことができます。囲いを出た幼児は、自分らしく生きら

れる空間を確保するために、不安であればあるほど奔走せざるを得ないのでしょう。何かで囲いを作ることは、そのための実に具体的な努力だと思えます。

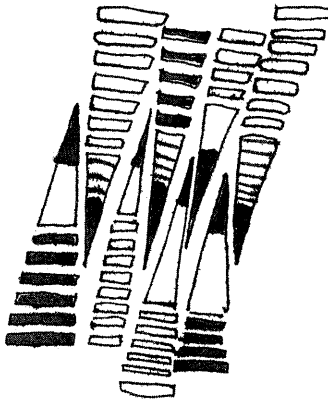
けれども、子どもたちにとって、囲いを作ることで自体が目的でないのは明らかです。同じ頃、やはりよく見られたのが、丈の高いつい立てで仕切った独立した空間を作ることでした。このつい立ては大人の背よりも高く、重い木製で、大人が使うために部屋隅に置いてあるのですが、いつからか、子どもたちが遊びに使うようになったものです。このつい立てで仕切られた空間は大変に独立性が高く、見られることを拒否します。おまけに、「はいらないこと」などと書いた貼り紙もしてあります。つい立てのすきまから目だけ出して、「なあに」と言われると、子どもならずともたじろいでしまいます。一昨年ですが、この閉ざされたつい立ての壁に、「どうぞあそびにきてください」と書かれた紙が貼ってありました。すきまからのぞくと、中には女兒が一人、本を読んでいます。自分をうまく相手に伝えることが苦手で、友だちとどうも長く遊べないばかりか、あからさまに友だちを拒否したりする子どもでした。工作が得意で、入園当初は手を入れると上から刃が落ちてくるギロチンとか、大きな歯のついた魚とか、噛むものばかり作っていました。その子が、扉に「どうぞ、あそびにきてください」と貼り紙をして、中でじっと待っているのです。絵本の『泣いた赤鬼』が、村人と友だちになりたくて、「心のやさしい赤鬼です。お茶もわかしてください。おいしいお菓子もごじます。」と書いた立て札を立てたことを思い出させ、胸を打たれました。ピタリ閉ざされた重い扉には、どうぞ誰か入ってきてくださいという、熱烈な思いがこめられていたのです。

嚴重に閉ざされた椅子の囲いの外側から、「こんにちは、入口はどちらですか？」と呼びかける

と、ハッと気がついて、たちまち椅子を一つ動かし、「こちらからお入りください」と招き入れてくれるのは、よく経験することです。目に見える垣根には、かえって人の出入りを秩序立てる入口がつけやすいのかもしれない。「入口はどちらですか?」という呼びかけに、子どもたちが一様に、ホッとしたような、うれしそうな表情を見せるのは、自ら閉ざしてしまった空間から自分の意志で、自分を人に明け渡さずに自由に出ていくことも、帰ってくることもできることに気がつくからではないかと思えます。揺れる自我を守るためには囲いを作ること必要でしょう。人間は無限の不安には耐えられないからです。けれども一度囲いを作ると、自分の力でそこから出ることはとてもむずかしい。子どもたちの遊びはそのことをよく表しています。

「子どもの領分」は、弱い自我を守り、また拡大しようとする精神の働きの所産です。ただただ堅固な壁で囲まれただけの閉塞状態の領分ではなく、拡張だけが目的の空虚な領分でもない、他との自由な交流ができる実り豊かな領分であってほしい。子どもの遊びは、一見道は遠くても、やはりそれを目指しているのだと思います。子どもたちを囲いを作ることに駆り立てている現実を痛みつつ、何とかそこから出る道を見つけ出してほしいと願います。

(立教女学院短期大学附属愛児研究所天使園)



南の島の子どもたち(4)

子どもが変わるに「とき」あり

浅野 恵美子

「すべてのことには時がある」といわれる。とき、それは、私たちの様々な思いをよびます。ときを待ったこと、ときにのれたこと、ときに従ったこと、ときを得たこと、ときをかせいだこと、ときをつくったこと、ときが解決してくれたこと、ときを逃したこと、ときが流れたこと等々が思いおこされる。

ある母親は、中学生である大きな息子がベタベタと母親に甘えるのでとまどっていると話していた。親が忙し

くて、十分甘えさせることができないできた為、今、甘えているのだと思いきえさせているとのことであった。いきりれなかったときが、あらたな「とき」を得て、いきなおされているようである。

又、ある母親は、中学になっても夜尿症のあった娘から激しい批判をくらい、それにショックを受け、自分を深く反省したそうであるが、娘は、それをきっかけに、ピタリと夜尿がなくなったと話してくれた。本当の叫び

を表現する機会が与えられた時、自分の内なる叫びが自覚された時、子どもは、自分らしく生き始めることができるらしい。娘は、「とき」が満ちて、「とき」を得て叫ぶことができたのである。

今回は、沖繩の短大生の「生い立ち」の手記を紹介して、子どもが変わる「とき」について考えてみたい。

○律子の場合——ぐれまくって育った親への愛

「私は三人兄弟の真中で、次女として生まれました。

私の母親は、二十代後半で結婚し、さらに四年間、子どもに恵まれなかったもので、半分以上、子どもを持つことはあきらめていたようです。それが、どうした訳か、長女が生まれ、私、長男が結局、年子で生まれたのでした。やはり、年子なので育てる側も、又、私たちも毎日が兄弟喧嘩でたいへんだったようです。特に、私は真中なので、絶えずどちらかと喧嘩していました。

両親は、私たちが生まれる前から共働きでした。で

すから私たち兄弟は、近くに住む祖母、伯母たちに育てられました。特に、母が仕事にでかける前など、幼いけど気づいて母親にべったりくっついたり、おいかけて行き、すぐ泣きわめいたようで、母親としても仕事へ行くのがとてもつらかったそうです。

両親は、日頃から夫婦喧嘩をよくしていました。ある夜、みんなが寝静まっていたことなのですが、両親の喧嘩で私たちが目をさました。当時、幼稚園生だった私は、夫婦喧嘩を聞くのがとても苦しくて、幼いながらも、どうかしたいと思い、わざと寝返りをうったり終いには泣きましたが、喧嘩は止まるどころか、逆によけいひどくなっていました。それは、私の小さい胸に大きい傷みとして残りました。

母は、私が小学校六年の頃に、三十年近く働いていた仕事を辞めました。私は、小学校までは、ごく普通の女の子として育ってきましたが、問題は中学に入ってからです。私はバスケット部に入部しました。私なりに一生懸命がんばり、友達もたくさんできました。

私たち仲良し七人グループは、男の子四人、女の子三人でした。

私たちは、毎週土曜日、家族の人が寝静まってから、こっそり家をぬけだして、友達の家へ出かけていきました。最初の頃は、お菓子とコーラといったぐいであつたが、次第にお酒も飲むようになっていきました。このグループでタバコを吸いはじめたのも私でした。このように生活が乱れるのに関連して、学級生活も乱れていきました。先生に反抗し、よく遅刻し、欠席、ずる休みも時々するようになっていきました。夜おそく帰ったり、無断外泊もよくしました。私は、このように非行の道に走っていくのも両親のせいだと、とても両親のことを責めていました。なぜか、両親を許せない気持があつたのです。そして、父親が家についていないことを利用して、悪巧みをはたらきました。家庭を一人で守っている母を見くだし、さげすみ、口でいいあらわすことのできない言葉でののしり、そればかりではなく、しまいには手を出すというような反抗を

繰り返していました。私は自分の行いを棚にあげ、両親は勝手だと憎みました。

今思うと、本当になんとおろかなことを、よくもまあ、あれだけできたなあと恥ずかしく思うのですが、実際私のやったことなんですね。その原因は何だろうと考えますと、やはり、母親の手で、特に幼児期という大切な時期は育てられるのが一番私にとって必要ではなかったかなあと今、強く感じています。……

あんなに親不幸だった私でしたが、今では自分の口でいうのもおかしいのですが、一番私が親孝行だと思いうくらいです。」

三人兄弟の、年子の真中に生まれたこと、母親が忙しくて十分接触してやれなかったこと、両親の不和があつたこと等、多くの要因が彼女の思春期における人間不信の噴出へとつながっていきました。両親の夫婦喧嘩を止めることができなかつた幼な心の無力感、彼女の心に愛されていない悲しみとなって残つたと思われまふ。彼女は、母親に対して不信任感をぶつけつつ、母親を試し

て、生き方を模索していたのです。得ることのできなかつた信愛感情を求めていたのです。母親が仕事を辞めたことも彼女のあまえを表現しやすくしたでしょう。

○正子の場合——仲間の反感に耐えて変わる

「小学一年、家庭内で衝撃的なアクシデントが起こった。それは両親の離婚である。離婚は、子どもの立場からすると実に悲しく寂しいことである。しかし、私の場合には離婚した方が幸福は訪れると信じていた。その原因は、時々父が、母を殴る蹴るの乱暴をするのを幼児の頃から見てきたからだ。そんな残酷なことをする父が嫌いで親だと思いたくもない程であった。

離婚後、母は夜の商売をした。その為、私は、寝る時や朝御飯の時など一人でいる時間が多かった。しかし、母と一緒に暮らせた満足感から寂しい思いは少しもなかった。当時、母は店づくりの為に借金があったようだ。母の顔はいつも厳しくて、小さなことでもすぐ怒ったりして、恐いイメージのする母だった。そ

の反面、母子家庭という立場から、とても過保護に深い愛情を受けて育てられた。

そんな暮らしの中で母に男ができた。私は、その時小学三年生であった。母の表情は、いままでと違って、顔がにこやかになり、明るく毎日笑っているようだった。こんな別人のような母を見ると、『これは私のママではない。』と複雑な心境におちいった。

母の心は男に全部いつているように見えて、寂しい思いであった。男に母を奪われたという気持ちで、この男に嫌な顔を見せたり、いろんな面で反抗したりしていやがらせをした。母にも反抗するようになった。すると母は、『今まで、食わず飲まず一生懸命育ててきたのに反抗して……』と涙ぐんでいたことを今でも覚えてる。

小学六年の時、友達とはじめて、グループを作って遊ぶようになった。友達に恵まれて、毎日楽しい学校生活を送った。そこで、自己中心的でわがままな性格があらわになった。その性格は中学一年の中頃、皆の

反感をかった。クラスと一緒に遊んでくれる友達が一人もいなかった。登校拒否をしたい気分にもかかわらず、心を鬼にして一日も休まなかった。本当に、この頃は、つらくて寂しい、苦い学校生活であった。深い暗闇の地獄にいるような中で耐えてこれた自分に驚き感心している。もし、この体験がなかったら、意地悪でわがままな自己主義人物のまままでいたのかも知れない。

中学二年には、再びグループを作って遊ぶようになったが、以前の後遺症が残り、口数は少なく他人にすぐく気を遣い、消極的になった。周りの人達がほそほそ話しているのを見ると、自分の悪口を言っているのではないかと何事にも自分の不利な方へと想像した。こうしたことで毎日が重い生活を送り、一日がとてもなく精神的な疲れがひどかった。その頃、母は以前の男とは別れて別の男の人と付き合い、結婚にまでいたった。私の二度目の父である。母の老後のことを考えると賛成するしかないと思った。今ではとてもよ

かったと思う。義父は私を自分の子どものように育ててくれ、母は働くことなく楽にすごし、精神的にも落ち着いていった。

高校生になると、自己を深く見つめるようになり、特に性格については強く意識した。いろんな人に接したり本を読んだりして自分の心を育てた。これによって、以前に比べて明るく積極的になり、はっきりと自分の意見が述べられるようになった。しかし、真実の人間としてはまだまだである。……」

正子が自己中心をのりこえていったプロセスが良くわかる。健全な自己愛が育っていたことが、仲間の反感に耐えることを可能にし、彼女の性格変容のターニングポイントとなったのである。

○松枝の場合——先生を泣かせて変わる

「五年生の時、先生と大喧嘩をしまして六年にあがったのですが、担任の先生は、とても感じのいい先生で、私はすぐに先生が好きになりました。



そんなある日、夜中に両親が話し込んでいる声が聞こえ、何気なしに聞き耳を立ててみると、どうやら私のことらしく、母は担任の先生に何ごとか指摘され、自分の育て方が間違っていたのではないかというふうな話でした。母がつまりさ惱んだことなど今まで目のあたりにしたこと無かった私は、その事が心に痛烈

に響いたので。自分は悪い子どもなんだ。でも先生が、あんな事さえ言わなければママは苦しまなくてすんだのに……そんな思いが頭に広がりはじめたのです。私が悪いのなら私本人に注意して欲しかった。それが悔しくなりません。そんな折も折、先生に対して言いたい事を何でもいから書くように課題を与えられたのです。チャンスだと思いました。『何で私を注意してくれなかったのですか。ママを泣かせた先生を許さない。』こんな風に書いたと思います。

放課後、先生に呼ばれ、反発を表情に装った私は、とても恐ろしい顔をして先生に向かいました。先生の話にのまれてはいけないというかたくなな気持でいっぱいでした。先生は自分が軽はずみに口に出したことを詫び、母に与えた影響を悔やみました。心の底から、私の心が開くのを待っているようでした。けれど、私は先生の目だけを下からにらみつけ、首を振ることすら、ましてや口を開く事などしませんでした。一言しゃべれば、自分がくずれそうで怖かったので

す。『何でも話してちょうだい。お願いだから。』と先生は言いました。長い沈黙の後、とうとう先生は泣き出してしまったのです。私はびっくりしたのと同時に

自分のしでかした事の重大さを思い知らされたのでした。自分も泣いて、心の内を全部はきだしてしまいたい衝動にかられたのですが、どうしていいかわからず、只先生をにらむだけでした。周りに立っていた友達四人でさえ泣き出したのに、私は鬼みたいな子どもだったと思います。先生は、最後の決断として『私の事が嫌いだったら、他のクラスに行ってもいいのよ。……私には、もうあなたを教えていく自信がないから。』と言い出したのです。私は絶望を感じました。先生に見離されてしまった、捨てられてしまったという思いが胸をしめつけました。そして一番決定的だったのは、先生が初めて私をみた時から『怖い顔をした子。扱いにくそうで困ったわ。』と思っていたという事です。私は、このクラスにきた最初の日、とても嬉しくてうきうきしていた自分を思い浮かべてがくぜん

としました。今でもそうなのですが、私の顔は、いつも怒っているように見えるらしく小さい頃からよく誤解されていました。

そんなことがあってから、『このままではいけない』と私は強く思いました。自己改革を始めました。誤解されやすい自分の顔を仕方無いとあきらめるのではなく、怒っても顔に出さないように気をつけ、自分から友達に話しかけ、なるべく笑顔を絶やさないように努めました。しかし、容姿を変えるのは簡単ですが、心を変えるのはたやすくはありませんでした。いつでもどこか、肩を張っていた自分がいたのです。

今こうして、あの時大きな心の傷を受けたと想っていたことをなつかしく、そして落ち着いた目で考えられることを嬉しく思います。あの時、友ではなく一人の大人が感情をあらわにしてくれた事が、意義深い事だったのではないのでしょうか。……」

先生の前で、自我をひきずって自分を変える「とき」がみつけれなかった松江。「とき」を急いで松江との

関係を変えようとした先生。すれちがい、傷つきながらも松江は、自己を変える決断をすることができたのでした。

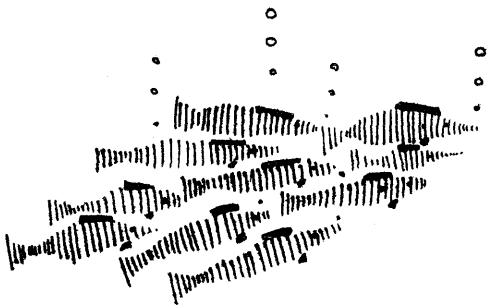
○「とき」をよむ

三つの手記を紹介したが、人間が成長するということはとてもステキなことだとしみじみ思う。子どもが変わる「とき」は、いろいろな関係に、いろいろな時期に訪れるものと思われる。

三つの手記でわかることは、思春期前後は、幼児期からの育ちの内容を再構成して、自分を変える「とき」らしいということである。親との関係がきっかけになることもあれば、友人関係の場合もあるし、教師との関係の場合もあるのである。

「とき」がよめるということは、時代がわかり、自分がわかり、関係がわかって、「めざめている人」として生きていることである。

(沖繩キリスト教短期大学)



んばっかり」と怒って訴えます。

この日は幼稚園の遠足の日でした。暑くなったので、疲れているのではないかと心配しながら迎えました。が、満ち足りた顔で帰ってきました。幼稚園から家へ向かう間も、途中でリュックをおろし汗をふいたり、水筒の麦茶を飲み、Aちゃんと楽しそうに笑い合っていました。Mちゃんにとっては、自分の友だちを私に合わせた喜びや、友だちに私を紹介する嬉しさ、そして二人を自分の場所へ迎え入れる誇らしさで心が満ちているように思いました。家に着いてからも、遠足の残りのおやつを分け合っ

って食べたたり、穏やかに過ごしていました。

私は、Mちゃんの、母親が帰ってからの変わり様に驚いていましたが、すぐに安堵感を覚えました。泣いて、怒って、ぐずることが、その時のMちゃんの真の心持ちを現わしていると感じられたのです。

Mちゃんが泣いて怒っている時、私はAちゃんを自分の膝に寝させながら、一人の女の子の泣き顔を思い浮かべていました。

今年の四月に小学生になったYちゃんが、年中組の時のことです。Yちゃんはどんなことに対しても、善意で解釈しようとする子どもでした。友だちが調子に乗り過ぎて迷惑をかけることがあっても、根気よく相手に話をする姿にも何度も出会いました。そのYちゃんが、男の子にぶつかられて泣いていました。相手の男の子も悪気があったのではないように見えました。私には、Yちゃんは許してあげることができると、いう思いが強くありました。それにもかかわらず、Yちゃんの涙はなかなか止まらず、ますます激しく泣き続けます。Yちゃんには三歳年上の姉がいて当時、母親のおなかの中にはYちゃんの弟がいました。五年近く末っ子として家中の愛を一身に受けていたYちゃんにとって、妹か弟が生まれることが、喜びと同時に大きな不安になっていることを、母親と私の間で話してしまいましたので、その不安が激しい泣き方につながっているのだ、と瞬間的に思いました。そして次の瞬間には、赤ちゃんがいてもYちゃんは今まで

と変わりなく家族から大事に思われていることや、私自身がYちゃんを大好きで、それはこれからも変わらないことを伝え励ましていました。弟が生まれてからは、少し混乱があったものの母親に弟の育児のことで注文をつけるくらい優しく気を遣う姉になっていることを知りました。乗り越えられてよかったと思っていました。Mちゃんの涙を見た時、Yちゃんの涙を止めてしまったことに気づきました。Yちゃんの泣きたい気持ちを理解し、励ますことはできたかもしれませんが、Yちゃんのが泣くにもっと添ってあげることができたのではないかと、という思いがしていました。そして、自分が子どもが泣くことに対して、自動的にマイナスなこととしてとらえてしまいがちなことにも気がつきました。子どもが生き生きすることばかりに気が向いて、泣いている子と出会うと立ち直らせることに力を使っていました。泣くことに、私が耐えられなかったのだとも思います。

泣くことを肯定的に受けとめることができてから、家

庭指導グループのK君の涙に出会いました。K君はお弁当箱を自分で持ってきて椅子に座りました。自分から食べよう、という気持ちになって食事を始めようとしていました。ふたをあげた後、自分の肘でお弁当を落としてしまいました。幸いお弁当は無事でしたがK君は泣いて走り回っています。誰に悲しさをぶつけるのでもなく、頼るのでもなく、ひとりですまよっているように見えました。二人の保育者になぐさめられて再び席につきました。すぐにピーマンを口に入れました。ピーマンを好きなんだ、と見ていると、二、三度かんで吐き出し、また席を立て泣き始めました。少したって、今度は立ったままハンバーグをパクパクと食べました。保育後の話し合いの時、K君が野菜を嫌いなことや、普段通っている幼稚園で頑張っていることを知りました。そして、泣くために来ている、という話も出ました。私も、K君がやらなくてはならないことに自分を無理やり合わせようとしているように思えました。そして、些細だと思えるような事でも泣いてしまうK君が、泣ききっかけを捜し

て、ここぞとばかり背負ってきた不安を時間と場所を越えて実現していることが伝わってきました。泣くことができる場所があつてよかつたと心から思いました。

泣いている時、その気持ちを理解してもらふことも心強いことでしょう。そして同時に泣かせてもらふことが救いになることがあることを改めて感じさせられました。

二、子どもたちが創っていく

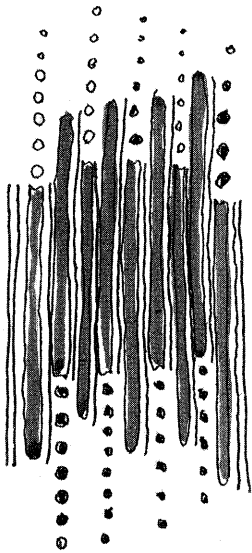
託児所の保育は全く初めてのことでした。気軽にお引き受けしましたが、当日、指定された場所に向かう電車の中で、どんなおもちゃがあるのか、どんな部屋なの

か、など気にかかってきました。完全に身一つで出掛けてしまったので、不安な気持ちも起こってきました。

七人の子どもたちと私に与えられたのは、二十畳足らずの会議室のような部屋と、洗濯カゴよりひと回り大きいかご三つにはいったおもちゃでした。野菜の絵のついた総合せ積木、レール、汽車、ぬいぐるみ、小さな買物かご、人形、ボール、トラック等、私には慣れない物がほとんどでした。

とりあえず口型に並べられた机を中央にまとめ、椅子を壁際に並べ、椅子の上におもちゃを置きました。

幼稚園就園前の子どもたちがほとんどで、何となく不安気で母親から離れ難い子もいました。そんな頼り無げ



な場を救ってくれたのは、ひとりの小学生でした。たま
たま代休で、妹と一緒に歩いてきてくれたのです。その
男の子がどんどんレールをつなぐと、それまで何をしよ
うと困り顔だった男の子たちも汽車に見入り始めまし
た。レールを組み替えたり、途中に障害物を置いたり、
私には思いも寄らないことを次々としていきます。本人
は決して、まわりの小さな子どもたちを遊ばせようと
しているわけではないのに、核になって他の子どもを引き
込んでいきました。

細々としたおもちゃより、子どもたちは廊下や階段に
いることを望みました。三階から階段で一階まで降りて
行き、エレベーターで戻ってくるのは、冒険をしている
ようでした。その時も、小学生の男の子が隊長になって
先頭を行ったり、小さな子を助けてくれたりしました。

おもちゃのはいっていたかごの中にはいり込む子ども
がいれば、バスや電車にして押ししたり引いたりしてくれ
ます。

最初に抱いていた不安も、すぐに消えてしまいとて

楽しい時間となりました。この小学生に助けてもらっ
た、という思いで、さようなら、ではなく、ありがと
う、と別れました。

講演会の日の託児は、ゆったりできる和室でした。ベ
ビーベッドや板の間もあり楽しいことが起こりそうな部
屋でした。保育者は私の他にもう一人、会を主催した側
の、子どもを連れた方でした。

午後の会でしたので、降園した幼稚園生が半分以上占
めていました。初めは折り紙で遊んでいましたが、ベビ
ーベッドのまわりでままごと遊びが始まりました。隣に
いた私は「うん、うん、遊び始めた、よかった よかつ
た」と思っていると、突然「お歌 歌いましょう」とい
う声が始まりました。私の期待は一瞬で消え去り、ままごと
をやり始めていた子どもたちは「ハイ」とベビーベッ
ドを飛び降り、さっさと声の主の元へ行ってしまうし
た。こんなに大人の声（この時は指示のようにも思えた
大人の声）に引っ張られ易いことを感じました。

同じ日のことですが、部屋の中ではどうしても収まり

きれず飛び出して行く子について廊下に出ました。なか

なか遊びが見つからないようでしたので『だるまさんころんだ』という鬼ごっこを提案しました。私が考えていた『だるまさんころんだ』は、鬼が目を隠しだるまさんころんだ、と十数えるうちに、他の子が鬼に近づき、十数えた後、鬼は皆の方をむいて動いている子呼んで手をつなぐ、という形式のものでした。参加した四人の子どもたちは同じ幼稚園に通っていて元々顔見知りで、一緒に遊ぶことに抵抗もなく、すぐにジャンケンをし鬼を決めました。その後は、アレレ、という光景が展開しました。だるまさんがころんだ、と鬼が振り返った時も他の子どもたちはどんだん鬼に近づくのです。鬼の方も、動いているのがわかって友達をつかまえようとはしません。どうするのか見ていると、鬼のすぐそばまで寄って行き、鬼も友だちがすぐそばで自分を見ていることが楽しいらしく、ゲラゲラ笑い合って一回が終わります。私の考えていたものとは全く違っていましたが、心から楽しんでやっていたのでそのまま一緒に続けまし

た。

どんな場所であっても、どんなおもちゃがあっても、子どもたちは自分たちで遊びを創り出していきます。託児の場では、全く、私の方に方向性が無い所から始まるので、そこで起こることに、私がついていく時間になります。子どもの方でも幼稚園とは違った場で予想のつかない面もあるのでしょうか、よく創り出していけるものだと思います。でもやはり、ままごと遊びが、「歌いましょう」で消えてしまったように、大人の支えも、子どもたちの遊びを創り出すエネルギーになり得ることを確認した思いです。

三、子どもを取りまく大人

幼稚園の教諭をしていた時のことを振り返ると、子どもの方から登園し、私を目指してきてくれていた面もあり子どもに囲まれていたということもできます。子どもに囲まれる存在から、今は近所のお姉さんとして、ベビーシッターとして、一度切りかもしれない託児の先生と

して、子どもを取りまく大人の一人になっています。

二歳になったばかりのSちゃんとはお隣り同士で、回覧版を持ってきてくださる時など必ず顔を見せてくれます。昼間も家にいることが多くなった私は、近所の子どもたちが遊んでいる所を通ることが増えました。私が入っていくとSちゃんが手を差し伸ばして私に近寄ってきました。買物の袋に触って何かを確かめているようです。母親に「Sちゃんの好きなものは入っていないわよ」と止められて、私もその場を離れました。家の外でも私を知っている人と認め、安心してかかわりをもっていました。それとは別の日、物置きから自転車を出そうとすると、Sちゃんが近寄ってきて、そばにあった空気入れに手をかけました。私は急ぐ用事ではなかったのですが、Sちゃんがやりたいだけやれるといい、と思いがながら、一緒に空気入れを動かしたり、動かし易いように足で押さえたりしていました。Sちゃんの家の空気入れがその空気入れと同じ型のように、自分の母親が自転車に

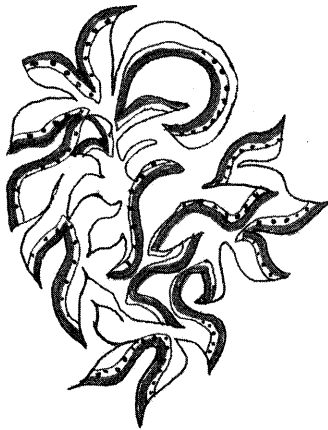
空気を入れているのを見ていたのでしょう。何度も繰り返しているSちゃんの横に居続ける間、ゆったりと時間が流れているようで嬉しく見えました。私だけでなく、Sちゃんの友だちの母親が、Sちゃんと向かい合っていて過ごしていることもあります。たくさんの大人とのかわり合いの中で、人に対して安心と信頼を深めていることを感じています。

はるにれの会を通じて知り合ったIさんとは家族ぐるみでおつき合いさせていたのですが、小学校五年生のAちゃん、小学校三年生のT君、年長組のKちゃんの三人の子どもたちは、私のことをちゃん付けで呼びます。Iさんのお宅へ遊びに行くと三人の子どもたちに私に加わり、四人で、ハンカチ落としやその他のゲームをしたり、風船でバレーボールごっこをして、思い切り笑って、Iさんが用意して下さった夕食をいただく、というパターンができていました。末っ子のKちゃんの担任をしていた方とも親しくなりましたし、Aちゃんは、こ

の年齢に特有と思える母親に対する反発とは違った形で一人のモデルとして私を見ているようです。先生でも親でもない自分を、中途半端な立場に居る者にとらえていますが、その中途半端がとても楽しく思えます。私に子どもができたなら、Aちゃんも、T君も、Kちゃんも遊んでくれる、と言ってくれていることも嬉しいことです。

隣りに住んでいるSちゃんにとっても、Iさんの三人のお子さんにとっても、平たく言えば私は近所のお姉さんであり、母親の友だちなのですが、幼稚園の教諭という枠にとらわれていた私には、中途半端であることが新鮮なのです。私が初めて自転車に乗れた時、それを見ていてくれたのは、向かい側に住んでいるおぼさんでした。私がそれまで練習していたことも知っていてくれたのです。多分、父や母も、私が自転車に乗れるようになったことを喜んでくれた筈ですが、お向かいのおぼさんが「乗れたじゃない、よかったね」と言ってくれた言葉だけを覚えていきます。乗れた瞬間、自分の他にも喜んで

くれる人がいたことは、大きな励みとなりました。自分がいろいろな所で子どもたちとかかわる中で、たくさんの大人が子どもたちのまわりにいることを再認識し、教師でも親でもない私にとっては中途半端と言える存在として子どもたちの横にいられることが、今、とても大切に幸せです。



今月号の巻頭言は、元家政大附属幼稚園の川崎千束先生にお願いしました。長年、幼児教育、保育者養成に関与していらした先生は、思うことに溢れていらっしゃるようで、「雨の日が続いたことが幸いして、早くまとめることができました。」と墨色も鮮やかな稿をいただきました。益々お元気に、未熟な私共にも、多くのことを教え伝えてください。

お茶の水附属幼稚園長小川剛先生は、同大学文教育学部で社会教育が専門でいらっしゃいます。園長になられて三年半。日頃のさまざまな思いをふり返り、何回かに渡って書いていただけることになりました。

ある日の、はるにれの会での話
「近頃、我が子が成長して小学生や中学生のことを書いているけれど、『幼児の教育』という誌名に『幼児期を過ぎていくのかしら』と思わない？」

「子どもが小学生や中学生になってか

ら、『幼児期』が見えてくることってあるでしょう。小学生の子の今の事を考えているのだけれど、いつのまにか、親として関わってきた、その子の歴史をさかのぼって、『これに似たことは、前にもあった』って思い出しているのね。そうすると、今、問題に思われている事柄が、多面的にとらえられて、ゆつたりと構えることができた事が何度もあるわ。子どもが幼児期の時には見えなかったものまで見えてきてね。」

『臨床の現場から』の飽田先生の事例も、『南の島の子どもたち』の浅野先生の事例も、ずっと大きい子どもたちだけれど、幼児期の子どもの子育て真最中の私には、とてもためになるし、はるにれの会の先輩ママ達の記も、心の準備（笑）ができて、はじめての子育てのよき指針となってくれています。etc.

読者の皆様はいかがお考えでしょう。ご意見をお聞かせください。

(Y)

幼児の教育 第八十七巻 第十号

十月号

◎

定価 四〇〇円

昭和六十三年 九月二十五日 印刷
昭和六十三年 十月 一 日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番
TEL・二九二・七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がありましたら、おとりかえいたします。

一斉指導で楽しく展開する **幼児の運動** (全3巻)



1. 大型遊具を使って
2. 小型遊具を使って
3. かけっこ・プール・運動会

一斉活動でのびのび育つ幼児の運動遊び集大成。
保育を楽しくする画期的な全3巻です。

〈全国学校図書館協議会選定図書〉

- 豊富なイラストと適切な文章で、指導の方法が一目でわかります。
- 遊具別に分類されているので、例えば「平均台」でどんな遊びができるか、すぐにわかります。
- 一つの活動に対して応用例がたくさん示されているので、園の実情に合わせてたり、創意工夫したりするのに大変役立ちます。
- 「うまくできない子ども」への配慮も充分にしてあるのが、本書の特徴です。

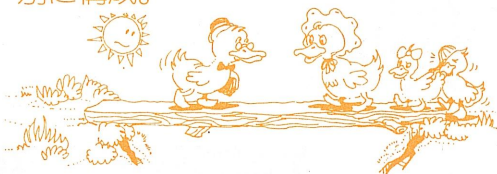
近藤充夫・中西雄俊・石渡敬一・渡辺真一 共著

B5判・各200頁・定価各1,800円 セット定価5,400円

新しい幼児体育 **おはなし体操**



楽しい話を聞きながら体を動かすと、いつのまにか子どもの体力づくりができる本。話と伴奏と動きのイラストつき37曲を収録、年齢別に構成。



石井文子・著

A4判・108頁・定価1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

オペレッタの教本がビデオになりました



今まで楽譜だけでは分かりにくかった点が、映像にすることによって、より先生方の気持ちに近づくことができました。数多くあるオペレッタの作品の中から9作品を選び、完全収録された保育資料ビデオです。

たのしい 全3巻 オペレッタ



●第1巻(60分)

沼の宝石 (11のオペレッタより)
ゾウのたまごのたまごやき (7つのオペレッタより)

●第2巻(60分)

宇宙人と星の花 (オペレッタベスト4より)
ビクビク ウサギ (3つのオペレッタより)
小鳥のはねやさん (9つのオペレッタより)
ふしぎな空のおはなし (11のオペレッタより)

●第3巻(60分)

インディアンのおはなし (3つのオペレッタより)
花と猫探偵 (オペレッタベスト4より)
タイム・マシン (9つのオペレッタより)



セット価格15,000円

カートンボックス入り
伴奏用カラオケセットテープ付き(3巻セットのみ)

各巻定価5,000円

藤田妙子 監修・指導・作詞・作曲・構成

1916年、東京に生まれる。
師事した専門家 ピアノ 弘田龍太郎(父)、ルドルフ・シュミット(ドイツ国立音楽学校主任教授)作曲 池内友次郎(東京芸大教授) 声楽 大熊文子(二期会) 舞踊 ドイツ・ベルリンのウィクマン舞踊学校にて、モダンダンスを修む。江口隆哉、宮操子両氏につきモダンダンスを研究 美術 日本画・新美術人協会々員(昭和15年頃から約10年間) 現在ゆかり文化幼稚園副園長。

オ・ペ・レ・ツ・タ・の・指・導・書

子どものための オペレッタベスト4
藤田妙子 B 5判 188頁 定価2,000円

幼児のための5つのオペレッタ
藤田妙子著 B 5判 120頁 定価900円

子どものための9つのオペレッタ
藤田妙子著 B 5判 178頁 定価1,600円

幼児のための3つのオペレッタ
藤田妙子著 B 5判 104頁 定価850円

幼児のための7つのオペレッタ
藤田妙子著 B 5判 144頁 定価1,200円

子どものための11のオペレッタ
藤田妙子著 B 5判 232頁 定価1,900円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館